シーワールドのアニマル達

●バンドウイルカの「レグルス」

ロッキーワールド「イルカの海」で、元気いっぱいに泳ぐイルカたちの中に、のんびりと休んでいる、ひときわ大きなバンドウイルカがいます。このイルカは、推定年齢20歳のオス（体長314m、体重345kg）で、名前を「レグルス」といいます。「レグルス」は、バンドウイルカの繁殖に貢献してもらおうと、平成9年12月に和歌山県の太地からやって来ました。搬入当初からあまり泳がずに水面で浮いていることが多く、体の調子でも悪いのではと心配しましたが、後になってこれは「レグルス」の休息スタイルだと分かりました。鴨川に来て1年8ヶ月後には「レグルス」を父親とした念願の子イルカが誕生し、その後も2頭の子イルカが生まれています。さらに、平成15年、日本で初めて人工授精により誕生した「サニー」や翌年生まれた「ウィル」は、いずれも「レグルス」の精子を用いた人工授精ベビーです。このように「レグルス」は、繁殖計画の目的を立派に果たしてくれています。

一番体が大きく、最もパワーの強い「レグルス」ですが、性格は温厚でとても人なつっこい一面があり、お客様とイルカとが触れ合える「ラブリードルフィン」でも人気者です。「レグルス」は、華やかなパフォーマンスに出場することはありませんが、これからもイルカの繁殖や人との触れ合いなどで活躍してもらいたいと願っています。（石塚 梨絵）

▲バンドウイルカ *Tursiops truncatus* の「レグルス」

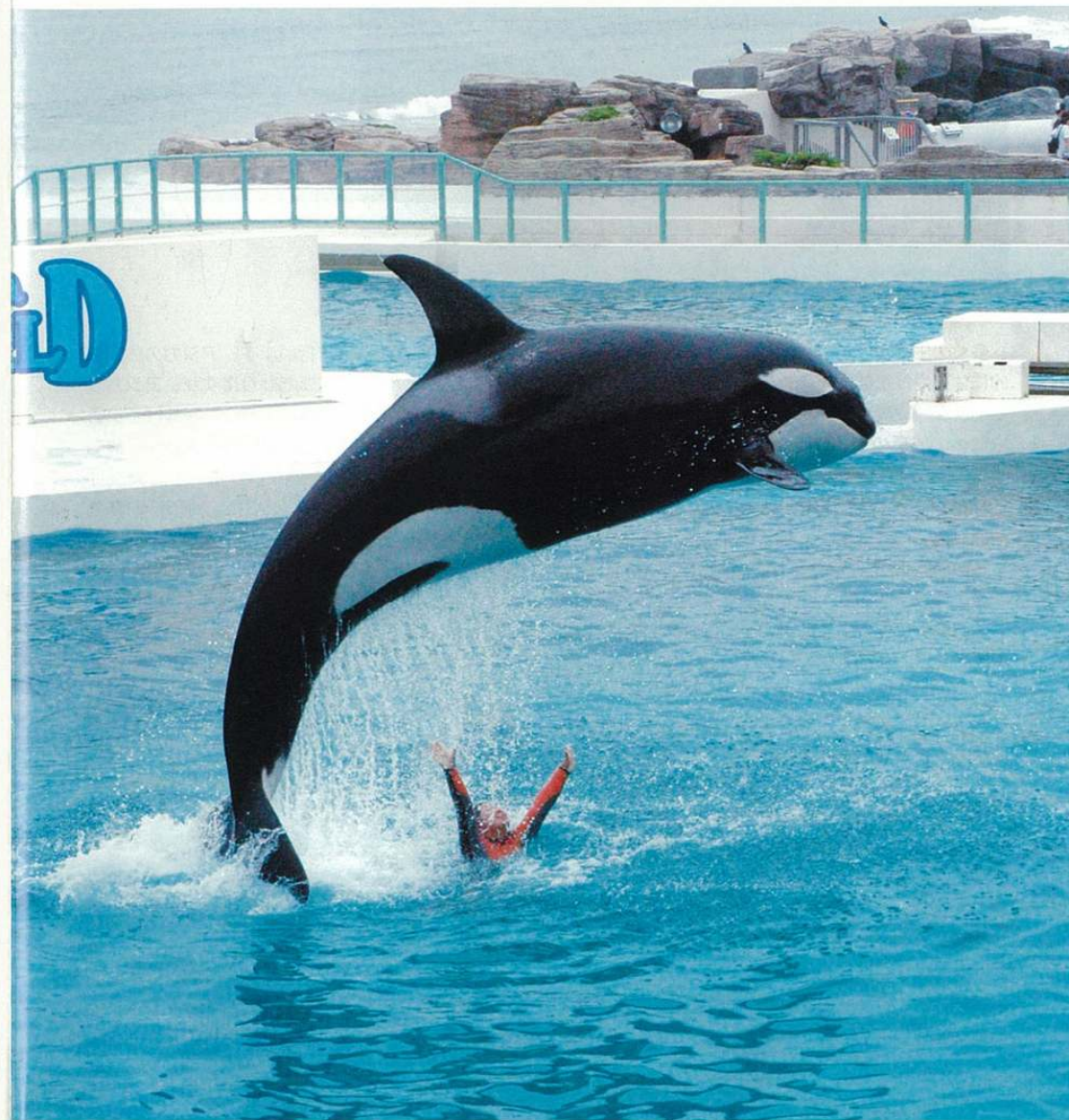
●マンボウの幼魚

平成17年4月20日、千葉県勝浦沖でキンメダイ漁の操業中に釣り餌を追いかけてきた体長わずか22cmのマンボウの幼魚が網で捕獲され、当館に搬入されました。体長10cm前後のマンボウの稚魚は「うちわ型」をしていることが知られています。このマンボウの幼魚は変態の途中と思われ、扁平な体は銀色に美しく光り輝いていました。マンボウは体長3m、体重2t以上にも成長しますが、その生活史には謎が多く、特に幼魚の生活については全く知られていません。鴨川近海では冬から春にかけて多くのマンボウが回遊してきますが、これほど小さなマンボウが捕獲されたのは当館開館以来初めてです。ちなみに、これまでの最小記録は体長35cmでした。

水族館に到着後、背ビレの付け根に寄生していたたくさんの寄生虫（ペンネラの一種）をていねいに取り除き、そっと水そうに収容しました。遊泳する姿はマンボウが持つのんびり屋のイメージとは違い、背ビレとシリビレをぜんまい仕掛けのオモチャのように動かし、とてもかわいく見えました。しかし、特に環境の変化に弱いのか、水そうに収容した直後から遊泳が安定せず、残念ながら搬入後2日目に死亡してしまいました。小さなマンボウの幼魚が大海原のどこでどのような生活をしているのか？好奇心をかきたてられる2日間でした。

（森 一行）

▲マンボウ *Mola mola* の幼魚

さかまた No.65 （禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(04)7093－4803

発行日 平成17年7月

http://www.kamogawa-seaworld.jp

さかまた

鴨川シーワールド NO.65

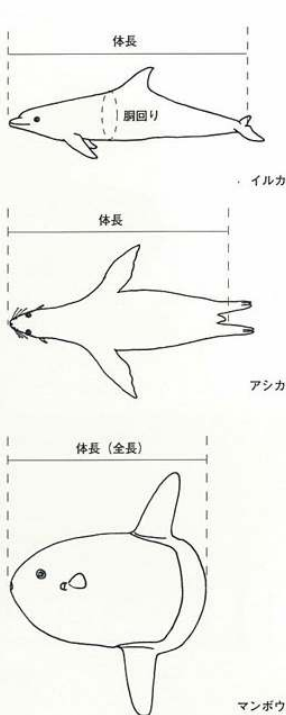
動物の成長をはかる

▲シャチの体長測定

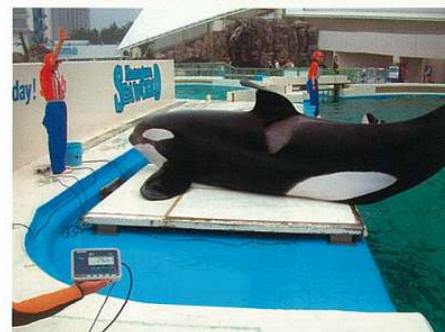
多くの生き物を飼育している水族館では、定期的に体長や体重などを計測して健康管理に役立てています。継続して計測することにより、その種や個体の成長の様子が分かってきます。その他、イルカの尾ビレの幅やセイウチのキバの長さなども計測していますが、野生動物では、これらを定期的に正確に計測することは非常に難しく、飼育している生き物から得られた数値が大変貴重なデータとなります。

それぞれの生き物で計測する部位や方法はさまざまですが、ここでは鴨川シーワールドで飼育している代表的な生き物について紹介します。

イルカやアシカの体長をはかる

体長の計測は成長状態を知るために必要なことです。イルカやアシカは吻の先端から尾までが体長です。水中生活をしているイルカの体長測定は、掃除などでプールの水を抜いて空にした時や、イルカをプールから移動するために担架に乗せて吊り上げた時などに行うことがありますが、大型のシャチの場合にはなかなか手軽に計ることはできません。そこで訓練により、水面で静止した状態にして計測します。アシカの体長も、訓練により床に伏せた状態にして行います。アシカの体がまっすぐに伸びている状態で計りますが、アシカは首をすくめることができるので、首が伸びていることをしっかり確認しなければなりません。最も大きなバンドウイルカの「レグルス」の体長は314cm、カリフォルニアアシカの「ボン」の体長は214cmです。

▲アシカの体長測定

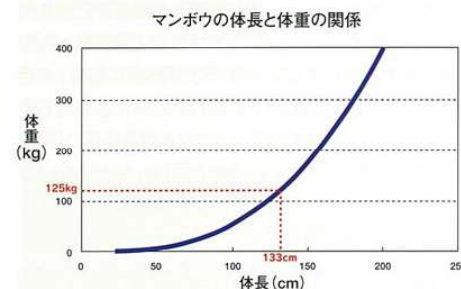
イルカやアシカの体重をはかる

体重の計測は、栄養状態や発育の程度を知るために必要なことであり、健康状態を判断し適正な給餌量を決定する上で欠かせない作業です。イルカの体重測定は、以前はプールの水を抜いてイルカを担架に乗せ、レッカー車で持ち上げて吊り秤で計測するという大がかりなものでした。また、アシカでは特製の檻にいれてから、力自慢の係員が大勢で檻ごと持ち上げて計測していました。しかし現在では、特製の台秤（電子秤量計）を使用し、その上にイルカやアシカが自ら乗るように訓練をして体重測定を行っています。大型のシャチやセイウチやトドなども自ら体重計の上に乗るようになり、人にも動物にも負担がなく安全で簡単に計測ができるようになりました。

▲シャチの体重測定（オスカーの体重は2,667kg）

▲セイウチの体重測定（タックの体重は1,100kg）

また、シャチやイルカでは体重を直接計ることができなくても、今までに蓄えたデータにより体長と胴回りが分かれば、計算によってかなり正確に体重を推定することもできるようになっています。鴨川シーワールドで最も大きなシャチ、「ピンゴ」の体長は6.5mで胴回りは3.7mです。これらの値から体重を推定すると約3,750kgになります。

マンボウの体重をはかる

魚類は、水そうの大きさや水温などの飼育環境によっても食べるエサの量が異なります。飼育が難しいマンボウには、体重の1～2%のエサを毎日正確に与えています。しかし、体が大きく傷つきやすいマンボウの体重を定期的に計ることはできません。そこで、体長を計りその値から体重を推測しています。基礎となるデータは、近くの鴨川漁港で水揚げされたマンボウの体長と体重をこまめに記録してまとめたものです。このデータは大変貴重なもので、飼育しているマンボウの体長を計ることで、ほぼ正確に体重を求めることができます。現在飼育されている最も大きなマンボウの体長は133cmで、この値から体重を推定すると約125kgになります。

しかし、体長を測定するのも大変で、体表を傷つけないようにダイバーが水中に入り、マンボウを水面まで誘導して浮かせた状態で計っています。

▲マンボウの体長測定

（金野 征記、大澤 彰久）

トピックス

帰ってきた「カモちゃん」

▲夕暮れの海岸に上陸したカモちゃん

昨年、鴨川シーワールドの前の東条海岸に姿を現して話題になった、ゴマフアザラシのカモちゃんが今年も姿を現しました。昨年は3月9日に現れ、4月16日に換毛（毛換わり）が終わると共に姿を消しました。それから9ヶ月後、今年の1月16日に「海にアザラシがいる！」との連絡を受け、ビデオカメラを手に海岸に駆けつけると、海面に時々顔を上げるアザラシの姿が確認できました。しばらくすると、そのアザラシは警戒する様子もなく砂浜へと上がってきました。ビデオのズームを目一杯にしてファインダーをのぞきこむと「どこかで見たような顔…」。そこで昨年のカモちゃんの写真と模様を比べてみると同じアザラシであることが分かりました。

▲波間から顔を出すカモちゃん

▲換毛中　上陸している時間が多く気持ちよさそう

▲カメラ目線？

換毛が終了すると北の海に帰るものと思っていましたが、今年は換毛後もしばらく居座り、結局5月4日までの約4ヶ月もの滞在となりました。海岸に現れた当初はテレビや新聞などでさかんに取り上げられ、休日には一目姿を見ようとたくさんの見物人が来ていましたが、時と共に見守る人も少なくなっていました。静かになった海岸で落ち着いて過ごせたのか、小枝をくわえて遊んだり、時にはサーファーと一緒に泳いだりと様々な行動を見せてくれました。来年もこのエサが豊富で美しい鴨川の海を思い出して帰って来てくれることを願っています。

（浅井 健吾）

フンボルトペンギンの人工ふ化に挑戦

▲ふ化3日目のヒナ

フンボルトペンギンの人工ふ化に取り組みました。一組のペアが昨年11月10日に巣の外で産卵してしまったので、人工ふ化に切り替えたものです。フンボルトペンギンは自然界では絶滅の危機に瀕していますが日本の環境には慣れやすく、多くの水族館や動物園で飼育されている種類です。

ふ卵器の温度は37.0℃～37.5℃、湿度は90%前後に保ちました。ヒナの体のもとになる胚が卵の膜にくっついてしまうのを防ぐために卵をひっくり返す「転卵」、抵抗力を増すためにふ卵器から卵を出して一時的に冷ます「放冷」を1日3回行いました。また、1週間に一度行った「検卵」はなによりの楽しみでした。暗い部屋の中で卵に光を当てて中身を透かして見ると、産卵後7日目にヒナのもとになる胚と血管が見え、20日目には胚が大きく成長し卵の半分を占める黒い影となりました。

▲検卵中（15日目頃）

30日を過ぎた頃には卵の中でヒナが動いているのが確認できました。そして、39日目にはいよいよヒナが自らのクチバシで卵の殻を割る「はし打ち」が始まり、41日目の12月20日に殻を破って元気なヒナが出てきました。

▲ふーぅ　つかれた…

その後は育すう箱に移して、巣立ちまでの3ヶ月間、係員がエサを与えるなど親代わりとなり育てました。この子育ての様子は期間限定の「アニマアウトガイド」としてお客さまの前で紹介することもできました。

この体験を活かし、これからはオウサマペンギンなどの極地ペンギンの人工ふ化にも挑戦したいと思います。

お食事中

お腹パンパンです

（野口 圭子）

モラモラ

●鴨川の海からライブ映像

太平洋を目の前にした南房総国定公園内に位置している鴨川シーワールドの天候、海や園内の様子をリアルタイムで紹介したいと、4月30日からホームページ（http://www.kamogawa-seaworld.jp）上でライブ映像の配信を始めました。ライブカメラは、隣接する鴨川シーワールドホテルの屋上に設置されていて、画面上で上下左右のコントロールが可能です。ロッキーワールドやオーシャンスタジムの他、東条海岸の様子も見ることが出来ますので、雄大な太平洋の美しさと鴨川シーワールドの魅力を充分にお楽しみください。

（田中 亮）

●白いタカアシガニ

1月10日に鴨川沖の水深250mの底刺し網漁で体色が白いタカアシガニ（甲長18.8cm、体重1.7kg、メス、写真右）が捕獲されました。このタカアシガニは、体の一部に赤い色が少し残っていますが、甲羅などは全体に白く、白化個体（アルビノ）と思われます。魚類の白化個体はニジマスやメダカなどでよく知られていますが、カニ類ではイシガニやガザミなど約10種類が報告されているだけで、タカアシガニでは初めてです。現在、他のタカアシガニと同じ水そうで展示していて、白い体色がひときわ目立っています。今後、成長に伴って脱皮をし、白い甲羅を脱ぎ捨てた後に、体色がどう変化するのか大変興味深いところです。

（齋藤 純康）

●トロピカルアイランドで新しい門出

鴨川シーワールドを訪れるお客様からの強い要望を受けて海をテーマにした婚礼プランをスタートし、すでに4組のカップルがゴールインしています。大水槽を前にしたトロピカルアイランドでの人前式や、キリスト教式など、普通の結婚式とは一味違った神秘的な雰囲気の中、多くの入園者からの祝福を受けた結婚式でした。この4組のカップルは「初めてのデートで来たから」「シーワールドが大好きで何回も来ているから」といった思い出を持っていて、その思い出をかみしめるかのように誓いの言葉を述べ、指輪を交わしていました。今後も鴨川シーワールドでの出会いが生涯忘れられない思い出になるように、心をこめてお手伝いしたいと思っています。（山口 真吾）

●カマイルカの保護

3月20日、東京湾の入口にある定置網に迷い込んでしまったカマイルカの子ども1頭（体長190cm、体重81kg、オス）を保護しました。春先、カマイルカの群れがエサのイワシを追って東京湾へ入ってくることがあります。このカマイルカは、ヤセて衰弱していたため輸送にはかなり気をつかいました。通常ではわずか1時間の距離ですが、イルカの体が乾かないように途中で何度もトラックを停車させ、イルカに水を掛けながら慎重に運び、無事にイルカプールへ収容する事ができました。十分な治療の結果、10日後には係員の手からエサを食べるまでに回復しました。今では新しい環境にもなれ、他のイルカたちと元気に過ごしています。

（井上 聡）